
THE FACE OFF

シクラメン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE FACE OFF

【Zコード】
N8102X

【作者名】 シクラメン

【あらすじ】

これは、ただ一人の変わったスポーツ「アイスホッケー」をしている少年の小さな小さなお話です。

注：これは小説を読もうでよくある主人公チート物とはすこし感じが違うかも知れませんが、長い目で見ていただければ幸いです。目的は、一人でもアイスホッケーを知ってくれる人・・・を作りだけです。

少々、専門用語が出てくる場面がありますので一番初めにある「ルール」で確認していただけすると幸いです。ちなみに、作者の処女作

でもありますのでホントに嬉しい田で見てやつてください

ルール（前書き）

ほぼWikiriました。
少々読みにくいかも
.
.
.
.
.

ルール

アイスホッケー（英語：ice hockey）は、天然または人工氷のスケートリンク上で、スケート靴を履いて行う団体スポーツ競技である。陸上で行われるホッケーの形式を氷上に持ち込んだものである。2チームが長方形（橢円形）をしたリンクの中で、スティック（ice hockey stick）（長い柄の先端部分に角度をつけ湾曲させた杖状の用具）を用いて硬質ゴムでできた扁平な円柱状のパックを打ち合い、相手方のゴール（Goal）（ice hockey））に入れることでその得点を競うゲームである。『氷上の格闘技』とも呼ばれている。漢字を当てて氷球と表記される。

スケートを用いるため、グラウンド上の同種競技と比べ格段に早いスピードが出てゲームをスリリングなものにするが、接触等による危険が高いため全身に防具を装着してプレーを行うことが義務づけられている。

『ゲームの概要』

リンクには、中央の赤いセンター・ライン（またはレッドライン）とそれをはさんだ2本の青いブルーライン（またはオフサイドライン）という3本の太い線があり、他にゴールラインという赤の細い線もある。ブルーラインを境界として、敵ゴール側をアタックゾーン、味方ゴール側をディフェンディングゾーン、中間をニュートラルゾーンという。フェイスオフ・スポットは、リンク中央のオフサイドライン手前、アタックキングゾーン、ディフェンディングゾーンでそれぞれ左右に設けられ、全部で9箇所ある。オフサイド、アイシング・ザ・パック、センター・ラインパスの判定は、

この線を基準に行われる。なお、専用リンクの外周はボードと言わるフェンス状の囲いで覆われており、このボードをパックが越えない限りアウトオブバウンズとはならぬので、プレーをいたずらに中断させることがなく、またボードの反発を利用したパスを行うことも可能である。

アイスホッケーにおいては、ゴールの裏側においてもプレイ可能であり、他の競技にはない大きな特徴となっている。攻防の要衝となる非常に重要なエリアである。

また、氷上に一度に出ることができる選手は、各チーム6名までと決められている。その際、選手はスケート靴を着用する。また、危険を伴う競技のため、防具は正しく装着されていなければ出場できない。

1チームは通常、氷上およびベンチ入りの選手を合わせ、2人のゴールキーパーを含めた1~8名から2~3名程度のロスター（登録）選手で構成される場合が多い。控え選手（Substitute）、コーチ、監督は、リンクサイドのボックスに入る。運動量が多く疲労がたまりやすいので、攻撃陣、守備陣（ゴールキーパーを除く）は、あらかじめセット・ユニット・ラインと呼ばれる組を編成する。競技の特性から長い時間プレーを連續することが難しいため、おおむね1分程度で組を随時交代しながら試合を行う。選手交代は、いつ、何人行ってもかまわない。その際に審判に知らせる必要はない。

プレー中の選手交代は通常相手チームに攻め込まれている時に行うことではなく、パックを確保しているチームが選手交代を行うか否かを実質的に決めることになる。選手交代のプロセスは、パックを確保したチーム側の選手が自陣ゴールキーパーの後ろに陣取りパックを守っている間に、パックを確保した側から選手交代を始め、その選手交代が始まつたことを見て相手側も選手交代を始めるのが普通である。なお、選手交代といえどもプレー継続中であるので、油断していたり選手交代に手間取つていたりすると相手側が攻撃して

くる可能性があり、互いに相手の動きを監視しながら素早く選手交代を終わらせることとなる。時計が止まつていればこの制約はなく、選手交代を審判に知らせることで交代完了まで待つてもらえない。

II 反則とペナルティ

試合中に危険な行為や不正な行為があつた場合、反則が取られる。

ペナルティ

反則を犯した選手やチームには反則の重さに準じて以下のペナルティが適用される。複数の反則が同時に起きた場合、一人の選手に複数のペナルティを課したり両チームにペナルティを課すこともある。

マイナーペナルティ

反則を犯した選手が2分間退場となり、ペナルティボックスに入る。反則を犯した選手がいるチームは代わりの選手を出さずにリンク上でプレイできる選手が一人少なくなる。ただし相手に得点された時点でペナルティは解除される。

メジャー・ペナルティ

反則を犯した選手が5分間退場となり、ペナルティボックスに入る。反則を犯した選手がいるチームは代わりの選手を出さずにリンク上でプレイできる選手が一人少なくなる。相手に得点されてもペナルティは解除されない。

ミスコンダクトペナルティ

反則を犯した選手が10分間退場となり、ペナルティボックスに入る。ただしこの反則は選手個人に課せられるため、リンクに代わりの選手を出すことができる。

ゲームミスコンダクトペナルティ

反則を犯した選手が試合終了まで退場となり、ベンチから退席して控え室に戻らねばならない。ただしこの反則は選手個人に課せられるため、リンクに代わりの選手を出すことができる。

マッチペナルティ

反則を犯した選手が試合終了まで退場となり、ベンチから退席して控え室に戻らねばならない。ただしこの反則は選手個人に課せられるため、リンクに代わりの選手を出すことができる。主にレフェリー・やラインズマンへの屈辱行為や観客への危険な行為を行った場合に適用され、追加の出場停止処分が課せられる。

ミスコンダクトペナルティやゲームミスコンダクトペナルティ、マッチペナルティの場合同時にマイナー・ペナルティやメジャー・ペナルティを課せられることが多い。その場合には別の選手が代わりにペナルティボックスに入る。（代行消化）

またゴールキーパーが反則を行つた場合も別の選手が代わりにペナルティボックスに入り、ゴールキーパーが反則で不在になることはない。

またペナルティが複数課せられた場合でもリンク上でプレイできる選手が3人以下になることはない。もし同一チームが3人以上の退場者を出した場合は、最初に起きたペナルティから順番に消化し最初の1名のペナルティが終わつた時点で、未消化のペナルティが適用開始となる。そのためペナルティの状況によつてはマイナー・ペナルティでもペナルティベンチに2分以上入つていることになる。

パワープレー

反則によるペナルティー・ボックスでどちらか一方の人数が少ない場合、人数の多いチームの攻撃を一般にパワープレーと言い、大きな得点チャンスとなる。特に相手が2人少ない場合をツー・メン・アドバンテージと呼び、最大の得点チャンスとなる。またこの時、人数の少ないほうのチームの状態をペナルティキリング（キルプレイ）と言い、通常は守備に徹することとなる。以前は、ショートハンドと称したが短腕症を連想させる等の理由でそう呼ばれなくなつた。

パワープレイの間に得点することを「パワープレイゴール」と呼び、パワープレイゴールが多いと勝ちに繋がりやすい。またペナルティキリングの状態であつても攻撃することは可能で、相手のミスなどからカウンター攻撃で得点することが稀にある。以前は「ショートハンドゴール」と呼んだが最近では前述の理由から「キルプレイゴール」などと呼ばれる。

ピリオド終了時

ペナルティによる退場の時間が残ったままピリオドが終了した選手は、インターバルの間はベンチに戻れるが、次のピリオド開始時はペナルティボックスに戻り、出場までの残り時間はそのまま持ち越す。

“基本ルール” ポジション

6人の選手のポジションの構成は、攻撃陣に左右2人のフォワードと守備陣にディフェンス2人、攻撃と守備の両方を行うセンター1名と、重装備に身を固めたゴールキーパー1人という配置が一般的であり、チームが反則を犯すと人数が減り攻撃の可能性が低くなるため、フォワードのポジションを1名ずつ欠いて守備重視にして行く布陣をとる場合が多い。ただし、ゴールキーパーをベンチに下げて、代わりに攻撃用の選手を投入する、エンブティ（6人による攻撃）もルール上認められており、ゲーム終盤に得点で負っているチームが、追撃の可能性を高めるために行うことが多い。

得点

ゴールにシュート、ゴールは常に1点、基本的にステイックを使って

パックをゴールに入れることが必要とされるが、自殺点はこれ以外でも認められることがある。パックを直接ゴールに入れるのでなければ、手を使って空中にあるパックを叩き落すことや、スケート靴でパックを蹴ることも認められている。

試合時間

試合は、正式にはピリオドと呼ばれる20分の単位を計3回行う。各ピリオドの間には、休憩時間として15分のインターミッションがある。インター・バルの間には、プレーで荒れたリンクの表面を整備するための製氷車両、通常「ザンボニー」が登場することがある。ちなみに「ザンボニー」とは製氷車販売ショア世界一であるメイカーナンボニー（Namboni）社から、製氷車そのものをザンボニーと一般名詞化したものである。

各ピリオドは、両チームのセンター同士が向き合い、ビジターチーム、ホームチームの順にステイックを氷面につけた後、審判が落下させるパックをステイックで弾き合うフェイスオフによって開始される。またフェイスオフは、得点、反則などがあった場合は特定のフェイスオフ・スポットで行われるが、稀にフェンスを飛び越えてパックがリンクから出た場合はフェイスオフ・スポット以外で行われる場合もある。さらにゴールキーパーがパックを押さえ込んだり、選手の防具にパックが挟まつたりした場合も、フェイスオフを行う。

第3ピリオドが終了して同点の場合は、延長戦に突入する。

延長戦

第3ピリオド終了時で同点の場合に延長戦に入る。延長戦はオーバータイムやエクストラピリオドとも呼ばれる。

第3ピリオドとオーバータイムの間にインターミッシュョンはなく（NHLでは1分、アジアリーグやEHFルールでの試合では3分間ベンチで休憩）、リンクの整備も行わない。

延長戦は基本的に5分間、先に得点を入れたほうが勝ちとなるサドンデス（いわゆるゴールデンゴール（→ゴール）方式）を採用する。アジアリーグのレギュラーリーグではオーバータイムではゴールキーパーを除き4人対4人（俗に言う 40×4）の状態で行う。

5分間を終えて両チームとも無得点の場合、規定により引き分け、再延長、ゲームウイニングショットのいづれかが適用される。

NHLのプレーオフやアジアリーグのプレイオフでは、再延長として15分のインターミッシュョン後に20分の延長ピリオドが行われる。どちらかのチームが得点を入れるまでこれが繰り返される。そのため最初の20分間で決着がつかない場合、第2延長ピリオド、第3延長ピリオドと続くことになる。

ゲームウイニングショット

延長戦で決着がつかない場合はゲームウイニングショット（GWS）を行い、勝利チームを決める。NHLではショートアカウトとも呼ぶ。

GWSはペナルティーショットとほぼ同じ要領で、両チーム3回のチャンスが与えられる。3回のチャンスでゴールが決まった数が多いほうに、得点が1与えられ勝利となる。そのためGWSが行われた試合は必ず1点差ゲームになる。

ゲームウイニングショットの参加選手、そして順番は各チームの申告で行われる。

3回のチャンスで同じゴール数の場合は1名づつのサドンデス方式となる。この場合はゴールキーパーを除き、最初の3回に登場した選手は一度だけ再出場できる。

ゲームキャプテン

キャプテンは、ユニフォームの左胸（チームによっては右胸）にCのマークを装着する。また、キャプテン代行はAのマークを装着する。審判の判定に対するクレームは、原則としてキャプテンのみに与えられた権利とされるが、キャプテンが氷上にいない場合にはキャプテン代行がこの権利を代行して行う。

ボディコンタクト

相手に体当たりして弾き飛ばすことをチェックという。基本的に、パックを保持している選手に対してのみ行うことが許され（保持している選手が相手を弾き返すのは不可）、保持していない選手に行うとペナルティ（後述）になる。肩、上腕および臀部で当たることになっている。肘から下や脚を使うことは認められない。ボードにあまり近い場所で行うとペナルティをとられやすい。

オフサイド

アタッキングゾーンにパックが入り込まないうちに攻撃側選手が入り込む、もしくはそこにいる攻撃側選手がパックに触れた場合オフサイドになる。パックを保持したままラインを踏み越しても（踏むだけならワッショアウト、後述）オフサイド適用。もしパックがユニットラルゾーンに出た場合攻撃側の選手全員がユニットラルゾーンに出る前に攻撃側選手の手によつてパックがアタッキングゾーンに運ばれた場合にも適用される。ライン手前のフェイスオフスポットでフェイスオフを行い試合再開。ラインが固定されているので防ぐのは比較的容易だが守備側が作戦として利用することもできる。パスオフサイドの場合パスの出された地点でのフェイスオフ。

アイシング

センターラインの手前から相手ゴール側に向けてパックを放ちそれが誰の手にも触れずにゴールラインを越えた場合を言う。自陣に攻められている側のチームがパックを取り戻した際、敵陣に向かつてパックを放り飛ばして危機を脱する行為を防ぐルールである。

また自陣が攻められ続け、守備側の選手の疲労が大きい場合に、取り戻したパックを故意に敵陣まで放り飛ばしてアイシングを取り、その間に選手を交代させる行為もしばしば見られる。NHLの場合、このような試合の中止をなくすために、アイシングを発生させた側のチームは選手を交代することが出来ない。

アイシングが発生すると試合は中断し、アイシングを発生させた側のディフェンシングゾーンのフェイスオフスポットまで戻されて試合が再開するため、相手方の攻勢となり失点（相手側では得点）の機会となる。

ペナルティ・キリング（キルプレイ）にあるチームについてはアイシングは適用されず、自陣ゴールに迫ったパックを敵陣深くに打ち出し時間稼ぎができる。

アイシングには「オートマチック」と「ワンタッチ」の2種類が混在しており、例えば国際ルールはオートマチックだがNHLではワントッチとなる。違いは、クリアされたパックがゴールラインを超えた瞬間無条件でアイシングになるのがオートマチック。これに対してクリアされたパックにクリアしたチームのプレーヤーがタッチした場合はアイシング無効になり、クリアされたチームの選手がタッチをした瞬間アイシングコールされるものがワンタッチとされる。つまりワンタッチの場合はクリアしたパックが相手ゴールラインまで誰も触らずに超えたとしても、そのパックをダンプインとして先に自分のチームが触ればアイシングをクリアでき、そのままプレー続行となる。

〃用具〃

アイスホッケーを行うためには、さまざまな用具が必要となる。

ステイック

ステイックはブレード湾曲の向きによって右利用と左利用がある。G K用のステイックはブレード部分の高さが高いなど形状がかなり異なっている。

パック

パックボールに相当するパックは硬質ゴム製で薄い円柱形をしている。非常に固く、生身に当たると骨折等の危険がある。事実、NHLの試合で観客の少女にパックが当たり死亡するという痛ましい事故も起きている。

スケート靴

靴はラフなプレイから足や足首を護るように頑丈にできている。スピードより耐久性や小回りの利きの方が重要なため短く厚い刃が装着される。G K用の靴は脛に装着する防具があるためあまり目に見えないがプレイヤー用とは異なる。他のスケート靴に比べ怪我をしにくいうことができているがその分どうしても重くなる。しかし危険を減らすという性質が最も強く初心者でも悪い癖は比較的つきにくいのでスケートの練習には適している。なお、アイスホッケー靴によるスピード競技も存在するといわれる。アイスホッケー用以外の靴を競技に用いるのは危険なため禁止されている。磨耗したり鋸びたりした刃はプレイに不利益なうえに危険なので定期的に研ぐ必要がある。鋸の防止法は刃を乾燥させることが基本。研ぎ方を間違うと悪い癖のある靴になる。稀に新品などでも悪い研ぎ方をしていることがあるので靴を変えた時はいきなり試合などに使わずまず試しに滑走してみてから使うべきである。

防具

かつてのプロリーグなどではヘルメットを着用せずプレーする選手が多く、前歯を欠損した選手の写真なども残っている。しかし、ルールの項にある通り競技には危険が伴うので必ず防具を装着する必要がある。無論、事故や怪我の防止が目的であるためプレイするうえで有利になることを優先して選ぶべきではない。防具にはヘルメット（頭を保護するためにバイザーがついているものもある）、肩周りや腰周りのパットなどがある。また、靴も足と足首における防具の役割を担っている。粗悪な防具ではかえって負傷の危険が増す場合もあるので信頼できるものを選ぶことが大切である。ちなみに高校生以下の試合では、フルフェイス（顔の前面全てに保護をつけること）が義務付けられている。GKは、顔面を保護する機能のあるヘルメットを被り、手の甲や足に特殊なパッドを装着し、ステッキを持たないほうの手にはパックをキャッチするためのグローブをはめる（野球で用いられるファーストミットに似ているが、サインはこれよりも大きい）。基本的に防具も靴もGK用のほうが頑丈に作られているが背中を見せることのないGKの性質上後部はプレイヤー用のほうが強固に作られている。

長々と失礼しました。次から本作です

プロローグ（前書き）

はじめましてですね。
不定期更新ですが、よろしくお願いします。

ボディーション

CFセンター フォワード
RFライト フォワード
LFレフト フォワード
RDライト ディフェンス
LDレフト ディフェンス
GK、ゴールキーパー

プロローグ

主人公、九条諒は現代日本最強のCFと巷では騒がれている。

正確無比なパス

相手を翻弄するボディショーニング

パックに喰らいついて離さない根性

ホッケー誌は彼を天才と褒めたたえた

しかし、諒自身はわかつている

自分自身は天才ではないということを

諒は凡才だ。

他人の倍の量のトレーニングをしても相手を抜き去るスピードも生

まれなければ、GKが見失う程のシュートも打てない。

彼は無力なのだ

諒は少し変わった経歴を持つている。父親は外資系企業の開発事業部部長というこれまた聞こえのいい経歴を持っている。

なので、16歳になる今の今までアメリカで暮らしていた。

おそらくその経歴が諒のアイスホッケーが上手くなってしまった原因のひとつである。

アメリカでは、生半可なプレーでは生き残れない。日本人特有の華奢な体つきである諒はアメリカで生き残るためにはどうしたらいいのか、そのことをずっと考えていた。

8月23日父親に辞令がでた

日本本社帰還命令

九条一家は引っ越しをなくてはいけなくなってしまった。

これは諒が田にした小さな小さな奇跡のお話です

Period1 新たな一步

8月28日 14:00 成田国際空港 入国ゲート

諒は10時間弱のフライトからようやく開放された。この開放感は、色々な意味でこれから始まる外国生活に不安を感じざるを得なかつた。

「お兄……大丈夫?」

隣にいる妹、優菜に聞かれる。

いつもは、生意気なことばかり言つているが兄が心配らしい。

「余計なお世話だ、それよりも早く荷物探せ」

「心配して、言つてるのに」

父は先に自分の荷物を探し出し、タクシーの手配をしている。子供たちを置いてマイペースに行動するのは、今も昔も変わらない。昔は兄妹でよく置いていかれていた。

兄妹は、母というものを知らない、優菜が産まれた直後まるで役目が終わつたかの如く産褥熱で息をひきとつた。

「あ、あつた!!」

優菜は自分の荷物をとる

「お兄のもあるけど……とる?」

「いや……とれよ」

「ヤダ」

「てめつ」

もう諒が言つたときには諒のスーツケースは、もう一周する羽田になつていた。

「諒、遅いぞ!」

「お兄おつそーい！！」

「むう」

結局もう一周した自分のスースケースを探していたら結構な時間がたつていた。

「早くしろ、外にタクシーを待たしている。」

3人は、スースケースの無機質な音をたてながら空港の外に向う。諒は日本の8月の蒸し暑さを不思議と受け入れていた

これがこれから暮らすことになる・・・・日本・・・・

「今度はすつきりした顔・・・・変なの」

「うるさい早くタクシーに乗れ」

「どーせお兄のことだからアイスホッケーのことしか考えてないんでしょ。」

図星だった。

ここで少し説明しておかなければならないことがある。

日本のアイスホッケーとアメリカのアイスホッケーは根本的に質が違うのである。

今まで諒がやってきたアメリカのアイスホッケーは、個人力を重視、対して日本のアイスホッケーはチームでパスをまわす組織力を重視。楽しみだった。

最強と言われたアメリカでのプライドを捨てる準備はとっくにできていた。

諒の挑戦はとっくに始まっていた

「そういう親父、」

「なんだ」

諒はタクシー内で父に話しかける

「俺、コーコーだったけか、どこにいけばいいんだ？」

「それは大丈夫だ手配してある。」

「…………」

「大丈夫だ、ホッケー部もある」

「安心した」

そう言い残すと、安心したのか諒は眠りについた

同日 14 30 下総高校 校長室

「しかし、夏の日差しは暑いねえ…………そう思わんかね、平

山君」

立派なひげをさすりながら初老の男性は一枚の写真を眺めながら言う。

一方の、頭を七三に分けた黒スーツの平山と呼ばれた男は口元に無理な笑みを浮かべている。

「ええ、確かに」

「しかし、学生は羨ましいこのような炎天下の中休めるのだから」

初老の男性は遠い目をする。

「しかし、アメリカの夏は蒸し暑くはないものの日差しがすごいらしい」

「工藤校長？」

「しかし、私は良い掘り出し物を見つけた」

「話が読めません」

「君にもわかるよ…………9月1日になれば…………ね」

平山はたまに禅問答のよつた言い方をしてくるこの校長のくせが嫌いだった。

「つまり、来るのだよ！九条諒、最強のアイスホッケープレイヤーが、これだから校長職は辞められない！」

「ぐじょう…………りょう？」

平山は聞いたこともない名前に疑問を示す。

「ああ、九条諒。この私を興奮させてくれ。」

平山はこうなつてしまつた工藤を止めることができないのである。一礼して、その場を立ち去つた。

同日 15 20 東京都江戸川区篠崎

「ここが今日から我が家だ」

父が紹介した場所は決して広くはないものの、ビックなおひつける空聞だつた。

フランベートマンション402号室。

入り口にオートロックの機械がついていりのマンションがこれか
らの自宅

諒は、この場所を自分の自宅として見れるかどうか不安だった。諒
の中での自宅は口サンゼルスにしかなかつたからだ。

今すぐにでも戻れるなら戻りたい
ジヨシュやスティープのいる口サンゼルスに戻りたかつた。

.

もう、戻れない

やるしかない

魅せてやる、俺のホッケーを

Period 2 季節はずれの転校生

9月1日 07 00 フランパートマンション 402号室
諒は、昨日自宅に送られてきた制服にうでを通す。新しいYシャツの糊のにおいがますます諒を高ぶらせる。

下総高校それが諒が行く学校の名前らしい、新校舎が一昨年にできたばかりののりにのつている学校らしい、諒的にはアイスホッケー部があれば校舎が半分崩れかけていようがなにしようがまったく関係ない。

「じゃあ、行つてくる。」

「んつ」

優菜は聞いているのか聞いていないのかわからないが、適當な返事をする。

優菜は、地元の中学に通つらいい。

諒は最近ランニングしているので、地元周辺はほぼ理解している。家から5分ばかり離れた篠崎駅に向かった。

諒は初めて地下鉄なるものにのつてているのだが、正直驚きを隠しきれていない。

ぴたりと線の通り停まる列車。

時間の通り到着する正確さ。

極めつけは迅速に田的駅まで運ぶ速さだ。

「すげえ」

おもわずむりしてしまった一言だ

ものの20分で下総高校の最寄り駅、西船橋に着いた
駅を降りるとちらほら同じ制服を着た学生を見つけた、しかし諒は

前日に場所は調べたので知っている。

北口を出て5分、パンフレットにはそう書いてあった。

威風堂々たる校門

五階建ではあるであろう校舎。

アメリカでは基本校舎は平屋か一階建てぐらいのものだったので、またまた驚く。

カルチャーショックだ。

諒は学校に着いたら校長室に行つてくれと父から言っていた。

中に入り階段を上る

この頃の諒は、もう新たな学園生活を楽しみにしている前向きな諒になっていた。

ゴム質の廊下を歩き校長室に向かう。

校長室

そう書かれたプレートの部屋を見つけ、2回ノックする。

「入りました」

中から校長らしき渋い声が聞こえる。

小さな声で「失礼します」と咳き中に入る。

入るとひげを生やした初老の男性、工藤がたつていた

「よく来たね、九条諒君」

「」のたびは、私を入学させていただき・・・・・・・

工藤は少し微笑みながら、諒の式辞を遮る。

「いやいや、奏君から聞いた通りだなあ。」「父が？」

「奴は私の息子としてはできすぎた人間だが、少し堅すぎるってね。」

「そう……ですか」

「まあ良い、歓迎しているよ、九条君。後これ

そういう工藤は茶封筒を渡す

「これは？」

「それはアイスホッケー部入部届け。入りたいんだろう」「お気遣い感謝いたします。」

諒は深深と頭を下げる。

「ふーん。アメリカ帰りだけどそういうことは知ってるんだ。」「父の教えです。」

キーンゴーンカーンゴーン

キーンゴーンカーンゴーン

「おや話すぎたようだ、これから始業式が始まるが、君はそこに座つていればいい始業式が終わったら君のクラスの担任が来るだろう。」

「はっ、お時間とらせてしまって申し訳ありません。」

工藤は手をひらひらとふり部屋を出て行った。

キーンゴーンカーンゴーン

また、チャイムがなる始業式終了の合図だ。

ガチャ

扉が開く、そこにはなぜか若いジャージ姿の教師がいる。

「君が九条諒だなー！」

暑苦しい

「そ、そうです」

「私の名前は、杉山一路すぎやま じゅういちだ。よし善は急げ」

諒の手をひったくるようにつかむと校長室から出て猛ダッシュで廊下を走る。

そして、ものの20秒程で1-Dと書かれた教室につく。

「ここが君の教室1-Dだ、あと廊下を走るとときは緊急事態のときだけだぞ。」

「…………はい」

諒は隠しきれない矛盾感を胸にしまいこんだ

「じゃ、君はそこで待っていてくれ私が大声でcome onって言つたら入つてきてくれ。」

「はあ」

諒はこれから学園生活に不安を感じざるをえなかつた。

「…………と言つわけだ、もうお前ら我慢できないよなー！転人生come on」

ようやく言われた。ここから始まる…………

諒はドアを開けて、教壇に立つ。

「九条諒です。アメリカのロサンゼルスから来ました。趣味はアイスホッケーとビリヤードです。よろしくお願ひします。」

言い終わつた瞬間に歓声があがつた

「というわけだ女子よ、イケメンが入つてきて良かったな。九条の席は…………」

「アタシの前です。」

「そ、う、か、九、条、あ、の、手、を、上、げ、て、る、女、の、子、の、前、の、空、席、に、座、つ、て、く、れ、」
「わ、か、り、ま、し、た、」

「よ、し、今、日、は、転、校、生、が、入、つ、た、か、り、H、R、は、早、め、に、お、わ、り、しち、や、う、で、

ホームルーム

「—」

みんなは、い、そ、こ、そ、話、し、を、し、て、い、る。

諒は、自、分、が、一、応、歓、迎、さ、れ、て、い、る、ら、し、か、つ、た、。

Period3 夏探しの親睦会

9月1日 11 00 下総高校1-D教室

一路の宣言通り、HRは早めの終わりとなつた。

クラスの中では、親友どうしで「今日どこ行く?」みたいな会話がされている。

「なあ、転校生今日暇?」

一人の背の低いかっこいいといつよりも、かわいいと言つた印象の強い少年が諒に話しかける。

「ああ暇だが」

するとかわいい少年は、にこっと軽く笑う。

「じゃあさ、お好み焼き食べに行かない?俺の名前は桐生湊きりゅう みなと湊みなとつちつちって呼んでくれよな。よろしく!—」

軽く親指を立てながら、ウインクを送つてきた。性格ほどやら軽いらしい。

「そうか、よろしくな湊、俺の名前は九条」

「諒つちでしょ。覚えてるよー」

「 はい?」

諒は変なあだ名をつけられ少し困惑している。

「でさ、どうなの?行こうぜ、お好み焼き!あつ、お好み焼きわからぬいか?えーっと、Japanese Okonomiyaki ?ん? Monjya?」

湊は頭に人差し指をあてながら考へている。しかし、知識が少し足りないらしい。今すぐにでも止めてあげなければショートしかねない。

「それをいうなら、A meat and vegetable pancakeとか色々あるだろ」

諒自身、お好み焼きの話にはかなり乗り気だった。なぜなら、テレビやインターネットでは日本の「お好み焼き」なるものを見たこと

はあるのだが、実際に食べるとなるとはじめてだった。

「へえ、諒君つて日本語もペラペラなんだね。」

ソプラノの女の子の声が教室の入り口附近から聞こえてくる。諒と湊は、ほぼ同時の速度で振り向いた。そこには、まさに大和撫子といつたセミロングの黒い髪に黒い目、切れ長の目小さく整った鼻の美少女が立っていた。

「げっ！？れつ 玲奈！？」^{れな}

「げつて、なによ、げつて」

軽く湊の頭をこづく。

「えつと」「

玲奈は舌を少し出して笑う。

その微笑みは、男子数人が振り向いてしまうほどだ。

「私の名前は、広瀬玲奈。湊の保護者やつてるの。よろしく。」

「ああ、よろしく」

二人はお互いを見ながら握手をかわした。

「握力は50後半か 何かスポーツでもやつてるの？」

「ああ、アイスホッケーを」「

玲奈は諒のアイスホッケーという言葉に反応する。

「諒君 アイスホッケーやってるの？」

「ああ、確かに珍しいよな、日本だと」

諒が行っている横で玲奈は湊の首を絞めながら聞いたとしている。

「何で言ってくれなつかつたのよ。」

「くつ、くるひ い、いや、言うタイミングなかつたし」

「そうやって他人のせいにして！－それがあなたの悪い癖よ！－！アイスホッケーでもそう！－！」

「ストップ」

諒は一人の言い合いに割つてはいる。

「どうしたの？」

「広瀬さんはとりあいすいい お前だよ」

「俺？」

湊はきょとんとした顔で諒に聞き返す。

「お前アイスホッケーやってたのか」

「あり、言つてなかつたつけ？」

「初耳だ」

「…………あんたつて本当に救いようのない馬鹿ね」

玲奈は怒りを通り越して呆れ返つていた。

「まあいい俺は早くお好み焼きが食べたいんだ、広瀬さんも一緒にどうだ？」

諒は湊のアイスホッケー宣言に、やほどの驚きを見せずに玲奈をお好み焼きに誘つていた。

諒は湊の「アイスホッケーをやつていると詰つ事実」「やほどの驚きはなかつた。うすうす感づいていたからだ。スラッシュの上からでもわかる筋肉。さらには、結構な熟練者だ」ということもわかつていた。

重心のブレだ。

本来アイスホッケーという競技に限らず、氷上でやる競技で重要なのは、筋肉だ、技術だという前にバランス感覚なのだ。そして、バランス感覚をつけるにはどうしたらどうしたらいいか。それは、重心なのである。そして、バランス感覚があることによつて氷を支配することができる。そして、彼は重心がまったくといつてもいいほどぶれていない。諒はそこから「なにか氷上競技をやつているのかな」ぐらいのことを思つており、そしてそれがアイスホッケーだつただけの話である。

「んーどうしよつかなー…………」

「いいよ、諒つち、早く行こうぜ。じゃあまた明日なー」

湊は早くお好み焼きを食べたいらしく、諒のYシャツの袖を引っ張り足早に教室から出た。

「ちょ、わかつたから、そでひつぱんな。」

二人は1-Dを後にした。

「…………はあ、あいつはいつまでたつても…………」

玲奈はそう呟くと誰もいなくなつた1-Dを後にした。

9月1日 13 00 西船橋駅周辺お好み焼き屋「巳」^み

「はい、到着ーーー！」

「よくこんな裏道の店知つてるな」

「まあ地元だし」

言葉とは裏腹に湊はまんざらでもない顔をしている。
「腹も減つた」とだし、早く入るとするか

「了解

巳は西船橋周辺のお好み焼きやでも、格別のおいしさでここのお好み焼きを食べたら他のお店で、お好み焼きが食べれなくなるよ。あーあ、諒つち残念だよ。（湊談）らしい。確かに、昭和の面影を残した店からはじいしそうなおいが漂つている。

店の横引き戸を開ける。

「へいいらっしゃ…………、湊の坊じゃねえか、隣のイケメンは坊の友達か？」

鉢巻をしたおっさんが言つ。

湊は、まあね。と言しながら特等席と湊が呼んでいる座席に座る。

「じやあ、おっちゃんこつもの一人前で」

「はこよーーー」

湊は常連らしき口調でメニューを頼んだ。

「よーし、待つてる間ホッケーの話でもしようぜ。」

「いいぜ、俺はアメリカのクラブチームでCFをやつてた。バスとボディショーニングには自信がある

まずははじめに諒が自分のポテションと自信のあるところをあげる。

「俺はCFだよ、下總って選手弱いからさ、俺1セカンド田なんだぜ」

湊は自虐的に言つ。

「どれぐらーの弱せなんだ？」

「千葉最弱」

「はい？」

諒はまさか千葉最弱だとは思つていなかつたので、思わず素つ頓狂なこえをあげてしまつ。

そして、理由を聞くいつとしたといいで都合良く鉢巻が材料をもつてきた。

「はいよ、桐生さんだ」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「じゃ、じゅくつー」

この後、諒がこの店のお得意様になつたのは別の話である。

9月3日 金曜日 15:00 下総高校 アイスホッケー部室前
諒たちがいつも授業を受けているところから、約3分ぐらい歩いたところに部室棟と言い、いろいろな部活の部室がかたまつている建物がある。そして、彼らはそこの2階のアイスホッケー部と書かれたドアの前に立っていた。

「はい到着！…ここがアイスホッケー部の部室でござります」

「案内感謝するぞ、湊」

湊は慣れた手つきでドアを開け「失礼しまーす」と言ひ。少し早すぎたようだ。まだ部室には誰もいない。

「あり！？だれもいねえや」

湊は近くの「テーブル」に座る。

部室自体はきれいに整頓されており、諒が思っていたよりも心地よさそうな空間だった。

「意外ときれいだな、部室」

「まあね、マネジャーが敏腕だか……」

「湊！…あんた何回言つたらわかるの？机の上に座らないの…！」

諒はどこかで聞いたことがある声を聞いた。湊は「ふにゃ」と鳴き声をあげて、あわててソファードに転がり込む。

「広瀬さん？」

「ふふ、ようこそ、アイスホッケー部へ」

「広瀬さんは、マネージャーだったのか。」

「ええ、そうよ。入部届けならたしかそこの…」

玲奈は近くの書類入れの方に向かう。

「違う違う、俺はもう入部届けは持ってる、今日はそれを提出して来ただけだ」

「あら、 そのなの！？」

玲奈は少し驚いた顔をしてくる。

「じゃあ、今日ビーセミーティングだからその時にでも先生に渡して

「ミーティング？」

玲奈は、ソファードラッグで寝転がりながら「maxi」と言つソーシャルネットワークを携帯でやつていて、玲奈はひと睨みきかす。

「そこアホから聞いてないの？」

「全然」

玲奈は諒の全然と言つ言葉を聞くや否や、電光石火で玲奈の頭を叩く。

「いつて、何すんだよ、玲奈」

「あんた何で、何でもかんでも諒君に説明し忘れるのよ

「えつ、何のこと？」

玲奈は頭を搔きむしりながら、言葉を続ける。

「今日のミーティングのことよ」

「…………」

「…………あ」

「やつと氣づいたよね

すると玲奈は、部室にあつたダンベルを持ち上げて、諒に近づく。

「今日、ミーティングあるから」

「ああ…………知ってる」

玲奈はガクツと肩をうなだれさせた所で4人の男が入ってくる。

「おっ、お前らいつも仲いいな」

「んつ？ あそこ奥にいるの誰だ？」

「知らないです」

「玲奈！ ソイツ誰だ！」

口々にそれぞれの感想が出る。そして玲奈は答える。

「えーっと、諒つちです」

玲奈はさらにガクツと肩を落とす。

「…………それでわかるか」「」

4人は声を合わせて突っ込みを入れる。

「はあ、湊、お前は馬鹿か？」

うわさになつてゐる人物が、ダンベルを置いて立ち上がる。

「初めまして、九条諒です。アイスホッケー部に入りたく思いました、今日のミーティング参加したく思います。よろしくお願ひします。」

諒は深く礼をする。

4人は、頑張れよ等の言葉をかけて仲間同士で談笑し始め、諒はダンベルに戻る。さうとしたが、

「知ってるよ、噂のアメリカ帰り」

一人の少年が話かけてきた、髪はロン毛で茶色が混じった黒、顔はそこそこかっこいいがどこかぱつとしない印象を持っている。

「えーっと、あなたは？」

「ああ、ごめんよ。僕の名前は綾小路秀馬。あやじのひしゆまボディショーン」DF、君と同じ一年生だ」

そう言い秀馬は右手を曲げ、執事のような恭しい礼をする。

「どうか、よろしくな秀馬」

「あなたのポディションは？」

「CFだ」

秀馬は少し考へる素振りを見せる。

「CFですか……美しい、實に美しいです。DFの次に美しい」

「そ、そつか？」

「ええ」

秀馬は意味不明な事を言い残しふらふらとビニカに行つてしまつた。

「アソシ意味わかんないだろ？」

ソファーを先輩方にせんりょうされた湊は、諒に話しかける。

「まあ、確かに、何か美しいとか何とか言つてたし」

「あいつ基本FWを見下してるんだよ」

湊は頬を膨らましながら言つて。

「はあ？」

「あいつ俺に、ウイング（RF、LFの通称）は穢れている。点を入れて勝つたら自分たちのお陰だといい、負けたら守りのせいにする。そんなウイングは穢れている。だってよ、ひどくねえか？」

「お前なんかしたんじゃないのか？」

諒が湊に聞いたところで顧問の先生らしき人が入ってくる。

「そろそろ、ミーティングはじめや、今日はお前に伝えたい事は2つある

「……はい」

「まずは、新入部員だ。先程、広瀬が彼の入部届けを持ってきてくれた」

玲奈はいつの間にか顧問の後ろにいる。

「九条、出て来い」

諒はそそくさと顧問の横に行く。

「九条諒です、口サンゼルスサンダーバードで1セット田のC.F.をつとめてました。よろしくお願いします」

諒は先程と同じく恭しく礼をする。

「だそうだ、九条は道具はもう持つてきているのか？」

「はい」

「なら、明日氷上練習があるから、その時にでも実力を見せてくれ

「わかりました」

そう言い諒は戻ろうとしたが、玲奈に手をつかまれる。

「待つて！！」

「どうした」

「諒君…………なんで黙つてるのー？」

「なにをだ」

玲奈はひとつ鼻を鳴らす。

「きまつてゐるでしょ。口サンゼルスサンダーバードの事よ」

「それがどうした。俺はただの九条諒だ。過去は関係ない」

諒はふつきりぽつに突き放す。

「嘘」

諒は玲奈に近づき小声で囁く。

「それ以上は言つな」

「なんで？」

「俺はそこまで」と人間じゃないからだ
そこまで言つと、部員たちのまつに戻つていった。

「玲奈 ?」

湊は夕日の差し掛かる部室に玲奈と一緒にいた。
いや、玲奈が残させたと言つたほうが正しい。

「今年は千葉県制覇どころか、全国だって狙えるよ
何が言いたい？」

「諒君よ」

「諒つちがどうしたの？」

「さつき彼、ロサンゼルスサンダーバードって言つたでしょ」

「ああ、いつてたね」

玲奈は1つ呼吸を置ぐ。

「ロサンゼルスサンダーバードはU-18 (under-18=18歳
までが参加可能なアメリカのジュニアリーグ) 最強のチーム」
さらに言葉をつづける。

「そこの一セツ」

湊は気づいた顔をする。

「つまり全世界最強のU-18

彼らはまだ気づいていなかつた。もう運命の歯車の登場人物になつ
ていることを、

Period5 謙れないプライド part1

9月4日 12 50 下総高校 アイスホッケー部部室

湊と諒は、昨日と同じようにアイスホッケー部の部室を空ける。昨日と違うところは、一人の男が椅子に座り昨日諒があげていたダンベルをあげている所だけだった。

「…………湊と…………誰だ」

男は湊たちを一瞥する、額にはつら汗をかいている様にも見える。

「えっと、りょうせ」

「九条諒と申します。今日は練習に参加させていただきたく思います」

湊が何か物申したそうな顔をしているが、諒はなかつたことにする。

「九条諒か…………」

「よろしくお願ひします」

男はダンベルを置く。

「俺の名前は御門健吾三年、LDFでこの副部長をやつてゐる」

健吾は立つと意外と大きいことがわかつた。いや、威圧感の問題かもしれない。

「お前がうわやの…………」

「えつ！？」

「勝負だ」

「はい？」

「今日の練習の前の時間を使う」

健吾はそう言い残すと自分の道具を取り、そそくかと部室を出て行つた。

「…………」

「諒つち？」

「はあ あの御門先輩とやうはぢれぐらに強いんだ?」

「部内最強」

「はあ」

諒と湊は自分たちの道具をとると、校門前のアイスホッケー部専門のバスに向かつた。

同日 13 15 下総総合スポーツセンター

下総総合スポーツセンター。

テニスコート、野球場、サッカー場、スケート場をかけ備えた首都密着型のスポーツセンターである。

しかし、諒からしてみれば期待はずれもいい所だ。

「到着!! あれ、なんかテンション低いね」

「気のせいだ」

諒はバスから降りて自分の道具を取つて、スケートリンクに向かう。何か 懐かしい、記憶にはないが、始めて来た感じがない。

ここからは一人の時間。

更衣室に入り、バッグの中身を少しだし、ネクタイをはずす、そのままYシャツのボタンをはずしていくレガースをつけ、ストッキングをはき、パンツを装着する。

諒は一人で黙々とやる。

この時間だけは誰にも邪魔されたくのない贅沢な時間だった。周りにはもちろんチームメイトがペちゃくちやおしゃべりをしている。

諒はそんなこと気にしていなかつた。

湊は九条諒の着替えを見て、再確認した。この男は一流だと、着替えるときですら芸術の域に入つていて。

「おい!!」

「いや!!?」

そこにはもう着替え終わった諒とまだまつたく着替えていない湊が

いた。

「どうした? ボーっとして」

「い、いや別に」

「ふーん、まあいい先行つてるからな」

そういう諒は氷上に向かった。

氷に乗る前に必ず諒は礼をする。

氷に乗った後、まずは軽く2・3周まわる、その後本氣で1周する。

調子はいつもの8割つてところか……

「九条諒」

減速していく諒に健吾が話しかけてくる。

「御門 先輩」

「10n1でいいな」

「はい」

「じゃあ、お前はパックを持って突っ込んで来い、俺を抜き去つて逆サイドの壁に触れたらお前の勝ち、お前からパックを取つたら俺の勝ちだ」

諒は黙つてうなずき

「手加減はにがてですかけどいいですか?」

一つ挑発する。

「こい、ルーキー。三年の実力見せてやる」

諒は定位置まで下がつていく。気づくと野次馬がたくさんいた。

ルーキー VS 部内最強

諒はパックを持ち、そのまま走る。

流石は部内最強だ。おそらく外から抜こうとすれば、自慢のチエックの餌食にされるだらうし、内側からはとてもじゃないが諒の足では抜くことはできない。

外か内か。

迷つた末に諒は一つの選択をした。

「どうした、ルーキー怖じ気すいたか?」

「先輩しゃべつてたら舌かみますよ」

諒はこの状況で、回転をとった。

健吾に体を密着させ、健吾を軸に回転をする。

この技術自体はホッケーの入門中の入門だ。しかし、あまり実践で使う人はいない。

周りの人間は「おおつ」と歓声を上げる。

健吾は完璧に抜かれた。

かに思われた。

確かに完璧に抜いた

抜いた後の諒の氣の緩みを彼は許さなかつた

彼は自分のステイックを彼のステイックに掛ける。
しかし、それはアイスホッケーではれつきとした反則だった。

「ルーキーに」

「先輩 それはんそ」

「負けるわけにはいかないんだよーー！」

パンツ

諒のステイックからパックが離れる。

諒はいきなりのことだったので、一瞬反応が遅れた。

そもそもつづいた時には、健吾にパックをとられていた。

Period5 謙れないプライド part2

「…………」

諒は言葉を失つた。

「こまどじて勝ちに来るなんて。

「でも…………だ、実践だったら今のは俺の負けだ。反則なわけだしな」

「いえ、俺の負けですよ」

「へえ、潔いのだな」

諒は少し笑う。

「だって…………先輩の顔かなり必死だったんですねもん」

「なつー?」

健吾は呆気にとられる。

「じゃあ、先輩。そろそろ集合の時間じゃないですかね?」

諒はまた笑う。

「失礼します」

諒は小さく礼をするとビニカに行ってしまった。

「あのルーキー強かつたねえ。何といっても肝が据わってる」

健吾よりも大きめの体格をしたGKの防具をつけている男が声をかける。

「ああ、創介か」

部長の三木創介みきそうすけである。

彼は部長なのに不幸で、下総高校にGKがいない + 一番体格がいいと言つ理由だけで代理GKをやつしていた、やつていた当初は、まるで幼稚園児にやらしたほうがまだましなんじやないか。と思わせるぐらいのレベルだったが最近は様になってきてはいる。

「で、どうだつたんだい、ルーキーは？」

創介は少し意地悪そうに聞く。

「上手いな、でもあれは得意分野ではないはずなのに

「得意分野……じゃない?」

「そうだ、俺が見る限り……」

健吾は湊とバスをしている諒を指差す。

「おそらく、あいつの得意分野。それは、チームプレー。もっと言うならば、あいつの得意なプレーは人を引っ張る、と言つよりも組

織の穴をプレーを埋める、そんなプレーが得意なのだ」

「ふーん、まあいいや。集合そろそろかけるね」

創介がスケートリンクに散らばっている選手たちに声を投げかける。

「集合……」

「…………」「…………」「…………」

「じゃあ、今日もいつも通りGKと1on1した後に、ローリング（ホッケーの練習メニューの一つ）それが終わったら試合も近いし、1・2年後で模擬試合でもしよう」

創介が練習メニューを伝える。部員たちも手馴れた動作でバックを中心を集め、1on1の準備をする。

「さつきは、惜しかったな。諒つた」

湊は1on1で自分の出番が来るまで諒に向こうかいを出す事にしたようだ。

「まあな

「でもさ、でもさ、健吾先輩の最後の技反則じやん。実質諒つちの勝ちだと思つよ」

「フツ・・・・・・・ありがとな」

「いや、本気だって

ローリングが終わり、皆も体が暖まってきたころあいを見計らって、健吾が声をかける。

「よーし、次は練習試合だ。各学年のキーパーは直陣のゴールについてくれ」

3年キーパー、創介と2年のキーパーは各自のゴールに向かう。

「じゃあ、試合メンバーを発表する 3年チームRDF
木下、LDF松尾、RFW新庄、LDF藤原、最後にCF . . .
.俺だ」

健吾はニヤッと囁つ擬音が合ってやうな笑みを浮かべる。

「...?」

諒は背筋をピクッとさせた。

「次、1・2チームRDF、毛利（2年）LDF、綾小路（1年）LFW、国分（2年）RFW、桐生（1年）CF、九条（1年）以上だ」

「...?」

呼ばれた者は、スケートリンクの中心にあるフェイスオフスポットにつき、呼ばれなかつたものはベンチに下がる。

サッカーやラグビーのように、アイスホッケーはまず出ることはできない。スタミナが続かないからだ。だから、ベンチにいる選手だからと言つて使えない選手と言つわけではない。

「次は試合能力だ、ルーキー」

「もう、持たせる花はありませんよ」

「上手こと」と叫びじゃねえか、ルーキー」

諒は口では、大きいことを言つているが、実のところ健吾のプレッシャーが凄いのも認めていた。

パックが落とされた。

試合開始だ。

パックを諒は上手くD、秀馬に渡す。

「やるじゃねえか」

健吾は諒に話しかけるが、諒は無視だ。正確には無視したのではなく、集中しているので声が聞こえていないだけである。

パックを受けた秀馬は少しパックの出す所を考える。

桐生・・・・マークがたくさん付いている。

国分先輩 少し遠い

九条 !? !?

どうして、あんな最適な場所に立っているんだ。

秀馬は諒にバスを戻す。

しかし、いち早く気づいた健吾が諒の前に立ちふさがる。

「(S)から先はいかせん」

「行きませんよ、俺はね」

諒はひとつ作戦を取る。

「湊、マークをはずして前に出る、全国を田指してゐならそれべらいのマークはずせ」

諒は高らかに叫ぶ。湊の足の速さは折込済みだからだ。しかし、実際の所はどれくらいなのかはわかつていなかつた。

「任せてよ。諒っし

湊は全速力で前に走る。

・・・・・予想以上に速い・・・・・これならーー!

しかし、諒には前に健吾がいた。通常のCFならバスを防がれてし

まうだろ？。

だが諒は違った。

「よくやった、ここからは俺の仕事だな

諒は絶妙なスルーパス（DFの間を通すパス）をだす。

「ナイス！！」

湊は難なくそのパスを受け取る。諒はもう後ろで湊がシュートを決めるビジョンしか見えていなかつた。

「クソッ、創介」

ピッ

「ゴールを知らせる、マネージャー玲奈の笛の音だ。開始24秒である。

「先輩、1-0つすよ。早くフォイスオフスポットについて下さい

「わ、わかつてある

諒はニヤリと先程健吾がしたような嫌な笑みをうかべた。再びパックが落とされる。またしても諒はパックをうまくDFに渡した。

「こ、小瀆な

「それが俺のホッケーです」

玲奈の終了の笛が鳴り響く。

「はい、お終いよ。22-8で1-2年チームの勝利」

「クソクソクソ！ルーキー！再戦を申し込む！」

健吾は悔しそうに再戦を申し込む。

「嫌です」

それに対して諒はそっけなくドリンクを飲みながら返答する。

健吾は今度は打って変わって真面目な顔になる。

「お前なら出来るかもな」

諒はきょとんとして、何をですか？と聞いてしまつ。

「ルーキー、いや、九条諒。お前は下総のキーマンになれ」

キーマンとは野球で言うエース、アイスホッケー界ではいなくてはならない、鍵になる選手のことを言う。

キーマン……俺が？

俺が……必要とされている？

「言われなくとも」

「あん？」

「言われなくてもなつてやりますよ」

健吾は自分の最期の仕事は今終わった。そう感じていた。

「よし今日はいいまでだ。だが、今日は終わる前に……。九
条ちょっと前に出て来い！」

健吾はチ・ムメイト全員集めて、簡易ミーティングをするようだっ
た。湊と後ろで一緒に並んでいた諒は前に出る。

「九条、今日の練習を見て、下総の悪い所やいい所は分かったか？」

「ええ

「じゃあ、皆にそれを発表してくれ

諒は驚く。だいたい、新参者の自分が何か言った所で親身に聞く訳
がない。

「まさか、お前緊張してるので？」

健吾はせりて言葉を続ける。

「大丈夫だよ、俺らはもつ仲間だ

「ホントに良いんですね」

諒は前置きを置く。

「ああ

皆を代表して健吾が答えた。

「わかりました。では、まず良い点から言こまると、FWのレベルの高さです」

部員は、疲れてくるはずなのだが真剣に聞いている。

「ですが、決してDFが弱い訳ではありません。プレイヤーのレベルはそこまで低くないと感じます」

諒は一息置き周りを見渡す。

「私の思つにこのチームの悪い点それは

皆が前かがみになる。

「GKが肩といつ点です」

「　　．．．．．　　はい？

皆は唖然として固まってしまった。

「3年側はまだ良いとして、問題は2年側です」

2年のキー・パーはビクツとなる。

「まず反応が遅い、スケーティングがなっちゃいない、キャッチンググローブが扱えていない、バタフライ（GKの基本的な止めるときの動作）ステイックの使い方もなちゃいない．．．．．」

諒はキリッと睨みを利かし、頭上に指を掲げ振りぬき2年GKを指をさす

「幼稚園児にやらした方がまだましだーー！」

Γ Γ Γ

部員達は絶句していた。

「…………もういいのか？」

「今日はこれで終わりだ。皆氣をつけて帰れよ。後、九条、着替え終わったら俺の所に来い。以上」

健吾の一言でその場は終了した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8102x/>

THE FACE OFF

2011年11月24日15時47分発行